

## ■ 巻頭言 ■

## 日本小児感染症学会理事長就任のご挨拶

岡山大学大学院小児医科学教授 森島恒雄

2008年11月の本学会総会で、理事長という大役を仰せつかりました。全く予想しておりませんでしたので戸惑いがありました。中・四国など地方においては、小児科医の不足は首都圏などからは想像できないくらい深刻な状況であり、私の所属する岡山大学も例外ではありません。地方における小児医療の維持に加えて、日本小児感染症学会の運営というベクトルの異なる仕事をこれから中心的に担わなければならないという戸惑いでした。しかし、今まで35年間感染症に携わってきた経験を土台に、感染・免疫という、日々新しい知見が蓄積されるこの分野の進展に、微力ながらご協力したいとの思いが勝り、お引き受けした次第です。

毎年学会参加者や会員数も増え、大きく前進を続ける本学会においても、いくつかの解決すべき課題があります。第1は、小児感染症の専門家としての質の担保です。小児感染症専門医とは何を、どのくらいできるのか、どうやってその専門性を他の人（医師、患者さんなど）に認めもらえるのか、この専門性の確立には相当のエネルギーが必要です。第2の問題として、大きくなった本学会は、法人化へのプロセスが避けられない状況と

なっています。さらに、世界から大きく遅れたわが国の小児における予防接種の現状打開などなど、問題は山積しています。

ただ、われわれが進むべき方向性ははっきりしています。日常診療の場で、感染症診療の質をいかに上げるか、さらに診断・治療・予防の向上のために、質の高い研究をいかに組み立てるか、本学会へ参加する若い先生方に、臨床研究の担い手として活躍してもらう土台（教育）をどう作るか、であると思います。ここまで書いて、小児科の魅力を研修医や学生に示し、少しでも小児科医を増やそうという姿勢と、日本小児感染症学会の包括分野の魅力をアピールし、担い手を育てる姿勢は同じなんだ、と気づきました。全力で、でも肩の力を抜きながら、理事長の職務に取り組みたいと思います。ご意見・ご要望をお待ちします。

本稿を終えるにあたり、前理事長 岩田力先生の的確な学会運営、学会の向かうべき方向性の提示など本学会への献身的なご尽力に改めて感謝の意を表したいと思います。

会員の皆様のご支援をあらためてお願い申し上げます。

\* \* \*